

「十二人を派遣する」という小標題の通りに、本日の箇所では1-4節で選ばれた弟子たちがその派遣に際して、イエスの説教が10章全体で記されるという形で始まります。

まず1節で「あらゆる病気や患いをいやす」という保障を与えられた彼らは、さらに本日の7節で「天の国が近づいた」と「宣べ伝えなさい」という新しい課題が加えて与えられます。この言葉はイエスの宣教第一声(4;17)とまったく同じものです。つまり、この時点で彼らはイエスと同じ働きをする者となるのであって、これが彼らが「使徒」(10;2)と呼ばれることの内実だったのです。

この「宣べ伝える」という言葉こそが、今後の弟子、つまり「教会」の内実を指すのです。この言葉は単にふれまわったり、教えるために集めたりという意味ではありません。11;5に要約される福音の質である「弱く・小さく・貧しい」者のもとへと遣わされて行く行為を指す言葉なのです。

わたしたちはともすれば「伝道」という言葉を教会を大きくするための方策として捉えてしまっていないでしょうか。イベントを繰り返し、集客する方法の模索にやっきになることが伝道だと思い込んでいないでしょうか。伝道とは「一点に集める」のではなく、「一点から派遣される」ことなのです。集められた所には同じような人がいるわけですから心地よいのは言うまでもありません。しかし、そうではなく、そこから派遣されるのです。

しかも、「金も・下着も・履物も」(9-10)持つなと描かれます。先入観や思い込みは捨てろという意味です。その先には異なる社会・異なる痛み・異なる人がいるのです。そこで「人と出会え」というのです。これが福音であり、イエスの定めた教会の内実だということです。

ただし、5-6節にある「イスラエル優先」の記事はここにしかありません。サマリア人の側に立つルカは記していません。おそらく偏狭で民族主義的なユダヤ人キリスト者グループが、イエスによる救いを民族的に独占すべきものと考えたのでしょう。マタイは一方でははっきりと異邦人に対して開かれた姿勢を示しているのです(4;15)、これは差し当たっての優先順位を記したに過ぎないと考えられます。

「自分は恵まれて幸せで、思った通りの人生を、好きな仕事で生きて来て何の不満もない。しかし、それでああオレはイイ生き方をしたとは思えないような気がする」。これは木下恵介さんの残した言葉です。別に誰の言葉でも良いのですが、この自分を省みて評価する言葉にはハッとさせられるところがあります。幸せな生き方とイイ生き方は違うということです。違うと言う限り折り合いを付けることなく、決定的に違うということです。人は結局、自分の人生を自分の手の中に持てない受け身なものですから、幸せな人生とはただ運が良かったということに過ぎません。しかし、イイ人生というのは、負わされるものを負い、必要とされるものに応じて思った通りに生きない側にあるのではないのでしょうか。その生き方は必ずしも幸せであるとは限りませんが、人としての筋道は通った間違いなくイイ人生です。

教会は幸せな人生を提案しません。開かれたイイ人生を提案するのです。つまり、集約に甘んじるのではなく、散らされた場で宣べ伝えるのです。